

発達と心理 : ドリーミングのための覚え書き

著者	藤岡 喜愛
雑誌名	国立民族学博物館研究報告別冊
巻	015
ページ	309-321
発行年	1991-12-13
その他のタイトル	Psychology : A Note on the "Dreaming"
URL	http://hdl.handle.net/10502/3592

Ⅳ

発 達 と 心 理



ドリーミングのための覚え書き

藤岡 喜 愛*

I. ドリーミングが示唆すること

III. ドリーミングを理解すること

II. 気功から自然を感じることに

I. ドリーミングが示唆すること

「昔、昔、おじいさんとおばあさんが暮らしていました。…」というように、おとぎばなしや民話のたぐいは、〈昔の話〉として私の心に宿ってきた。それが、オーストラリアに縁があって、アボリジニの文化に触れたとたんに、心にこだわりが生まれた。ドリームということがあって、それは世界生成の話でありながら、同時に現在型で生き続けている話でもあるという。ドリームは、古事記とその内容こそ異なるが、やはり神話の語り口を示している。従ってそれは神話でありながら現在の生活規範でもあるという [ISSACS 1980]。すると私たちは、アボリジニの心の中に、精神世界の中での一つの生ける化石を見ていることになるのだろうか。

巨大な虹の蛇が、原初の時代 (dream time) にのたくって、今の山や川ができた。人間も含めたあらゆる生き物の世界が始まり、それは今も虹の蛇によって維持されている。アボリジニはいまも秘密の儀礼を通して、歌と踊りによって、そのことをたてる。虹の蛇すなわち大地の母は、同時にすべての生き物の母であり、その美しくも巨大な姿を、今なお雨上がりの空に顕現する。

この世界にあるすべてのものは、山、川、すべての生き物は、人間もむろんのこと、互いに生命をひびかせ合い、またそれを通して、神話的、超自然的な存在もまた躍動しているのである。すべては過去・現在・未来を通して一体であり、生命の本質を共有している。それは、現在にもとづいて過去を推定するといったようなことではなく、生命も自然物も本質的に一体であり、創世の時すなわちドリーム・タイムから未来へ、永遠につづく一つの世界、ドリームとは、そのような世界の認識のことである。

アーネムランドの、岩壁のある地域には、精霊たちは自らの姿とともにドリームの

* 大手前女子大学 文学部

世界をみずから描きのこし、いまなおそこに生きつづけ、岩壁のないところでは、人は樹皮画としてドリームを伝承し続ける。人々にとってそれは過去であると同時に現在である。

以上はアイザックス [ISAACS 1980, 1984], バート [BERNDT 1982], ルイス [LEWIS & ROSE 1988], ノースカル [NOONUCCAL 1988], ウォーナー [WARNER 1969], スタナー [STANNER 1979], その他の文献を見るうちに、ドリームについての大同小異の注解のあることに気付いて要約したものである。いずれも、アボリジニ自身によるか、多年にわたるアボリジニ文化の研究者によるものである。そこにはかなりの実感ないしは共感にもとづく了解が示されているとよいであろう。これをさらに要約すればつぎのようにいえよう。すなわち、原初の時代(ドリームタイム)から現在まで、ドリームは世界の一体性の認識として保たれている。それはそのまま、ロックアートや樹皮画としても表現されて認識の手がかりを与え、未来へも引き継がれる。

このところの感じ方は、さらにロックアートの重ね描きについてのアボリジニたちの見解において、いま一つの生き生きした感じ方として知ることができる。ロックアートは、現場で観察すれば何重にも、先にあった絵の上に重ね描きされていることがよくわかる。それは、先にあった絵をなぞることで、古い絵を鮮明に再生したのではなく(その例ももちろんあるが、一般には)古く薄くなった絵と無関係に、まるで先に描いた絵が無いかのように、上へ別の絵が重ねられている(バラマンディの上にカンガルーの足が重なっている、といったように)。

これはなぜそうなのであろうか。人が描いたものではなく、精霊がみずから描いたとしても、なぜ平気で、先にある絵の上へ重ねるのであろうか。この疑問に対して、岩壁面は限られているから、とか、昔の人は一度習字した紙の上へさらに習字をしたものだとか、かなり合理的な解答が考えられた。私はしかし、ドリームの世界の姿としてロックアートを見るうえで、上の解答は筋ちがいのように思われた。そうして、ヴィクトリア・リヴァーのアボリジニの見解を見いだした [LEWIS 1988: 49]。ドリーミングの存在たちは自分で描き直すのだ。それはちょうど、古い木が枯れたあとに新しい木がそこを占めるのと同じだ。済んだよ、交代しよう、みんなを新しくしよう、というわけである。朽ちた株をおおう、新しいしげみ。

バートやアイザックスによれば、ロックアートは絵としてできあがったもの、というようにみるべきものではなく、描くこと自体が重要なのであり [ISAACS 1984], リタッチして新しく鮮明にし直す場合も、描き手と、描き直されたものとはドリーム

の中で精神的に特殊な仕方では結ばれているのでなければならぬと注解している[BERNDT 1982]。この注解を通してみれば、〈精霊がみずから描いている〉と信じている人が、その手で精霊やその他のドリーム世界を描いている、といえる。

こうしてふたたび、先にとりあげた疑問に戻ってくる。すなわち、アボリジニの精神世界において、私たちは、私たちの精神世界では失われた先史時代のその化石を見いだしているのであろうか。この疑問は、未開から文明へという、例の慣れきった見解の一つの具体例とも印象づけられるゆえに、一つの疑問としての存在理由を持っているといえよう。

慣れきっている考え方の例としてはルロワ＝グーランを挙げておく。蔵持不三也は彼のことを「歴史が知を創造し、知が歴史を創造する—アンドレ・ルロワ＝グーランの知は正にそうした壮大な位相地平に位置している。つねに人類の始原から出立し、現在を経て未来の時代をもうがとうとする彼の知の比類なき営みは、そのまま人類が生きてきた歴史精神の営みでもあるのだ」[ルロワ＝グーラン 1985: 293]と評している。そのルロワ＝グーランに対談者のクロード＝アンリ・ロケが問う。

「オーストラリア原住民の絵にもたいへん関心をお持ちのことですが、何があなたをそうさせているのでしょうか？」

「それが真に神話文字であるということ、つまり何ごとかを語る絵であり、ひたすら口頭によって伝えられる内容である、ということです。また、それが神話的な時間のうちにぶら下がっていること、言い換えれば、正確な時間の指示を欠いているということも、…彼らの絵はこうしてお互いのうちに有機的な構造をとっているのです。…先史芸術には似ておりません（旧石器時代の芸術では図像の中に解剖学的な正確さと動きが追求されているが）いったいに非常に《直線的な》オーストラリア原住民の絵には、そのような特徴が全く見られません。」[ルロワ＝グーラン 1985: 105]

「旧石器時代の壁画の芸術が如実に示しているように、人間はリズムを図像化したり、記号や抽象シンボルを描いたりすることからはじめ、やがて少しずつ写真主義へと向かっていきます。」[ルロワ＝グーラン 1985: 113]

ルロワ＝グーランは、もはや、『ゴールデン・バウ』におけるフレイザーのようなあからさまな〈進化論〉者ではない [FRAZER 1925]。しかもなお〈時間的序列〉とも呼ぶべきものが潜んでいる。私もまた、これからは逃れることが出来ない。ここに問題の根がある、というべきであろう。事象を〈時間的序列〉においてみることは、私たちが厳しく訓練されてきた認識の習慣であり、これがアボリジニのドリームヤロックアートを、生ける化石かと疑わせる原因である。

私はさきに、ルロア＝グーランのいう棒状の画、とりわけてそれが顕著な精霊ミミの姿について、その了解の仕方の試論をこころみた。進化を時系列的に考えることをやめ、時々刻々の生命形態の展開であると考えれば、すべての時点で〈生命世界の全体〉が成立している。精神作用の表現においても同様に、どの時点にでもわれわれの精神は本来的な表現活動のいっぽうで、他者との了解可能性を増すための写実的表現の傾向とを保っている。棒状のミミの姿に相当する描画は、本来的な表現活動の結果であって、とりわけて原始性を強調する必要はない。その証拠に、われわれ自身が現在でも同様に、必要に応じて棒状の人物像を描いていること、などが試論の要点であった [藤岡 1988]。

以上の試論の考え方が当を得ているとすれば、本文で取り上げたアボリジニのドリーミングの世界もまた、同じ方針によって了解できるのでなければならない。ドリームの世界は、われわれの昔の神話と似た型をとりながらも、同時にわれわれ自身の現在の精神世界としても生きているはずであろう。ではその現れともいえる現象が、いまだどこかで普通にみられるであろうか。私たちは、それが詩や童話の世界である、といってもよいであろうし、心理臨床の場でみられる箱庭やイメージ面接の記録においてみられるともいえる。また詩の世界の中から、われわれの心の基本的な性質を説きあかした例としてパシュールの広範な業績を思い出すこともできる。フロイトやユングが精神世界の様相を理解するための手がかりを得るものとして神話に注目したのも同じ理由からであったといえよう。そうであれば、私たちはいま、精神作用の古い形としての神話的様相と、新しい形としての理論的様相とを、時系列的に横に並べてみているのではなく、精神作用の内的かつ直感的な層と、外的かつ実際の層との重層構造を上から眺めおろしているのである。これは私たちの視点の採り方の問題であった、というべきであろう。

そうであれば、次の問題は、神話的な内的な層が本来そなえている〈実感〉性の問題である。私たちは現在、自然科学的認識の力をかりて、きわめて〈合理的に〉自然界の全体性を論じている。これはもっぱら言語が備えている記号性に頼って、自然界の全体性を論じているために、具体的に〈自然〉に対して手を加える際には、しばしば〈実感〉を欠いている。このことに慣れきってしまえば、アボリジニのジャッキー・ウヌンが私たちをともなってブッシュに入ったときに、ここにいるのは自分の友人だから受け入れてほしいという意味の紹介を、ブッシュの中の精霊たちにしてくれるという行為は、いかにも子供じみた原始的な行為として感じられる。しかしこの挨拶の行為は、自然界の全体性への〈実感〉があればこそ、作法として成り立つものであ

り、〈実感〉が言語化されるとき、ドリームの内容として語られるものとなった、と私には思われる。端的に言えば、自然科学的認識は記号により、ドリーミングの認識は感じることによる。前者は専門家としての学者の手に握られるが後者は感じている一人一人の心の中に保たれる。しかし私たちはいつのまにか、感じることを軽蔑するようになった。

Ⅱ. 気功から自然を感じることに

私は気功を習うことによって、私自身が〈感じる〉ということ、みずから抑圧してきたことに、はっきりと気付くようになった。私はいま、知り合いとなったジャッキー・ウヌンたちが、アポリジニの暮らしの中で、現在では私たちがすっかり抑圧してしまっている〈自然を感じる〉ということ、現在でも当然だとしていることを〈知っている〉といえる。〈自然〉はまず感じるものだ、といわなくてはならない。その根拠をここでは考えてみたい。

私は1988年の3月19日～27日にわたって、津村喬を代表とする「第3次中国観気旅行」に参加した。内容は気功法の講習を主とし、あわせて終わりの一日が学術交流にあてられた。これが私にとっての、いわば本格的な気功法への入門にあたる。ついでこの年の7月に、福州大学の日本語教師である郁貝紅が留学生として私の研究室に研究生として加わった。郁は日本語の高度の研修を目的として留学したが、あわせて中国鶴翔庄の教授資格を持っていたので、その形を習い、8月のオーストラリア旅行中、ほとんど毎日、一回は実行していた。さらに昨1989年6月には、助川明が天安門事件をきっかけとして、帰国、助川の2年間におよぶ中国気功法習得の成果に接するようになった。気功太極15勢、外丹功予備式、その他の形を実演してもらい、ごく表面的にまねたりもしている。最近では創元社発行のビデオシリーズに収録されているスワイショウをまねて、ほぼ毎日、30分～1時間程度の実習を実行している。ここでは気功そのものが当面の話題ではないので、以上は私自身の気功についての履歴を述べ、以下述べることへの一つの信憑性の資料としたものである。

以上のような実習を経るあいだに、他の体験をも含めて〈気感〉と呼ばれる感覚がだんだんに強くなってきたことがまず注目できる。

掌の中央にある労宮と呼ばれるツボのあたりが熱い、重い、ビリビリする感じ、などが実習のたびにだんだんハッキリしてきた。助川から送られる気を受けた感覚もまたいっそうハッキリ感じられるようになった。この点は1980年に、有力な人から掌へ

気を送られたのにまったく何も感じなかった事実があるので、気感の感受性が実習を通して増すものであることを明瞭に証拠だてたことになる。

私をはじめに習った中国鶴翔庄は、そののちの自発動を容易にし、したがって養生保健法としての効用も高いとして中国に一気に流行したといわれているが、私自身も実習を通して自発動を体験している。自発動というのは、リラックスした身体が覚醒意識の支配から脱して、いわば勝手に動き始めるのである。人によって、もちろん動きは異なるし、私自身でもその日、その都度、動き方は異なっている。気功法からの解釈としては、自発動によって身体が自分の動きたいように動いて、おのずから全身の気のめぐりをよくし、全体を整えるという。(この解釈は野口整体において、活元運動と呼ばれている身体の自動運動のそれと一致しているといえる)そしてこの自発動もまた、気功の実習を重ねて全身がリラックスする程度が増せばいっそう発動しやすくなる。

今日、中国気功法がわが国で知られるようになったきっかけの一つは、この自発動が外気によって誘発される現象がテレビを通じて人目を引いたからでもあろう。気功師が送る気を受けて、患者の身体は前後に揺れたり、歩いたり、何か踊りの手振りをするかのような動作をするようになる。この現象の実際には、北京西苑病院内で私も接している。見慣れていない目には一種異様な感じでもあり、見る人の好みによっては催眠術とも呪術とも感じられるであろう。しかしこの現象がそんなものではないことを、私自身の体験によって説明しておきたい。

鶴沼は中国での鍼灸、気功の研究をすでに6年にもわたって積み、中国での開業の資格を持つ練達の人であるが、たまたま私を訪問してくれ、私の請いを容れて、外気を送ってくれた。私は目を閉じ、なるだけリラックスして、気を受けることを期待しているだけである。鶴沼は私の背後に立っている。もちろん両者とも無言である。私には鶴沼は見え、何をしているかは全くわからない。

しばらくして私には背後から押される感じがあり、上体が前にゆらいだ。これをきっかけとして、私の身体はいろいろに揺れた。後ろへ揺らぐときには、背中あたりに空虚が発生した感じで、それによって後ろへ吸い寄せられるようである。しばらく揺れたのち、上体を下へ引かれるように感じて、ゆっくりとしゃがんでしまい、さらにしばらくののちに尻を下へおろし、ついには仰向けに寝てしまった。

こんどは胸筋あたりに鶴沼の両掌が貼りついてひっぱりあげている感覚が強烈に感じられて、その感じのままに私はゆっくりと、もとのように立ち上がってしまった。これらのことを、外気を送ることによって、事前の何の了解もなしに、鶴沼は私にさ

せてしまったのである。

この体験から次のことがいえる。外気を受けている私の意識水準は、催眠を受け入れているときのそれに極めてよく似ている。しかしこれが催眠術の現象でないのは、何も暗示されていないという点で明らかである。私自身でさえ、つぎに私の身体がどのような動きをするかを予測できないままに動いている。意識的な制御をやめ、身体の動きのままにしようとする意志のようなものは、かすかに働いているとあってよい。するとこれは、うまく鶴翔庄を終わったあとの自発動の動きと同じ現象であるといえる。この際、身体はまったく身体自身が動きたいように動く感じであって、私の意識はむしろその動きに添って動いているのだとあってよい。これはある程度の忘我の境地と呼んでもよく、事実、終わったあと、目をひらいて、ア、自分はここにいたのかと軽く驚くようなことはしばしば経験する。したがって外気を受けて動くという現象は決して催眠現象ではない。暗示はどこにも存在しない。しかも受け手の動きと送り手の動きとはよく同調している。この点は、私のこの場合は同席者が確認しているし、私自身が他者に気を送る場合も、鶴沼ほどの強さには遠くおよばないにもかかわらず、私の送り方と受け手の動きとはかなり同調している（特に前へ押すつもりするとき）経験があるので疑いの余地はない（ちなみに、私の身体と鶴沼の手の間には平均的に1.5mはいつもひらいていた）。

以上の例によって、私としては、人が互いに気を感じ合うこと、を知っているし、したがってテレビ画面に報道的に紹介されている外気の例はすべて事実であるということができる。

これに関連して、少し本論の趣旨からはなれるきらいはあるが、この際触れておきたい点がある。それは、こんにち報道されている外気医療という現象が、まるで気功師が送る外気のみによって治療されるかのように受け取られがちであるという点である。このことがいっそう気功法というものの流行をうながしているかもしれない。しかし、もしそのように解されているとすれば、それは誤解である。外気を受けて自発動をおこすことによって患者の体内の気血のめぐりをうながす効果はあるにしても、その一方で患者が、処方された気功法をみずから熱心に実行していることを軽視してはいけぬ。ガンが治ったという例もそうであって、外気のみで治るということは皆無でないにしても一般的でないことは間違いないといえる。患者の身体が気功と自発動とを通して、自分にとってのぞましい気血のめぐりをみずから見いだす、という点にこそ真の要点があるというべきである。

ちょうど8年前には、私は掌に気を送られてもまったく無感覚であって、〈気〉は

単なる哲学的概念にすぎなかった。その後、少しずつ実感は増し、納得もしはじめてはいたものの、本格的に気功を気功法として実習しはじめたのは先にのべた北京の経験以来の2年間にすぎない。この年数の少なさと65才という年齢を考慮すれば、誰でもその気になって気功を練習すれば容易に私の程度にまでは達しうるといえる、いわば普通の現象であって、取り分けてウサンクサイと思われるような特異な現象なのではないこともあわせて注意しておきたい（野口整体をはじめとして、わが国にも同型の現象はすでに少なくないことも合わせて注意しておきたい）。

本論文脈にもどって、人と人との間に気感の交流があるとして、木や石との間にも同様のことは認められるであろうか。この点では今田求仁夫が数年来「樹林気功」を提唱しているが、私自身はまだこれには参加していない。北京での初めての気功講習の際には、その機会があって、私自身も由緒ある古木の前に立って掌を向けてみたりもしたが、何の感じもなく、てれくさいばかりであった。しかしその後オーストラリアの樹に何気なく掌を向けたとき、掌に激しいビリビリとする振動感覚があってびっくりしたことがある。同様の軽い感覚はその後2回ほど経験しているが、それを感じさせる木とそうでない木とのちがいについては見当がつかない。樹林気功ということも事実ある、という点ではいまは納得しているが、まだよくわかったという実感は得られないでいる。しかし仮説的にいえば、陽光を浴びていても、眼にみえているのは可視光線の波長のものであるにすぎないのと同様に、木から何かを受け取っているが、たまたま感じとれる場合は少ないのであると考えることはできる。実際、森林の中へ歩み入った際に、何ともしれぬ、表現しがたい森の気を雰囲気として受け取ることは一般にはよく認められており、それなればこそフィトンチッドといった物質的基礎さえ探りあてるようになったのである。これを急に万物にまで広げることは論理的な飛躍があるといわねばならないが、仮説的には、私たちはみな万物から気を受け、私たちもまた万物へ気を送っている、とすることは許されねばならない。一挙に万物といわずに、特に身の回りのよく見知った事物の程度の範囲にとどめれば（人によってその範囲の広狭の差は大きいであろうが）、とりわけてアヤシイことを述べているとも思われぬ。思えば、昔の人たちは、ごく素朴にこうした感覚を知りつつ暮らしていたのであったろう。こんにち私が、いかにも事々しく、また論証がましくこうしたことをあらためて述べねばならないのは、近代産業社会を維持してゆくべきメンバーの一人としての、意識の層への訓練による、というべきであろう。

こうして私は、もう一度アボリジニのドリームの世界へ立ち戻る用意ができたようである。

Ⅲ. ドリーミングを理解すること

「自分の心のなかの世界と、自分を取り囲んでいる現実の自然とがどうやらシンクロして動いているらしいということに気づいた。わたしの見ている雲は、もはやいつも見ている雲ではなかった。それはまるで生き物のように自分の心の状態に合わせて形を変え、それにつれて砂漠全体が呼吸をしていることが突然知覚できた。

心のどこかに自分を呼ぶ声がしてやもたてもたまらず、私たちは目の前にただ一本しかない道をさらに車を走らせた。

わたしを呼んでいたのはこの場所だった。わたしはこの場所に見つけられたのだ。その頂にただ一人で腰をおろして、どれぐらい時が流れただろうか、ある時わたしは初めてその場所全体を見ている自分がいることに気づいた。わたしは空からその頂にいるもう一人の自分を見ていた。

その場所は、この地球が最初にできた時、まだ大地が柔らかかった頃に、地面があたかも海の波のように大きくひとつ波を打ち、その波がいまも崩れ落ちようとしたまま固まってしまったかのような地形を見せていた。わたしは、今、とてつもなく大きな波のてっぺんに乗っかっているのである。

ここでは石ですら生命を持ち、山々は偉大なる呼吸を繰り返し、植物も鳥も人間も、その全てが全体として調和がとれているのだ。そのなかのひとつに起こることは全体に影響を与え、世界はそれに合わせて微妙に姿を変えつつあった。

私は、これまで自分を育ててくれた両親や自分に血を分けてくれている祖先たち、街に残してきた妹や友人たちのことを、生命のつながりのことを考えた。これまで育ててくれた一切の生命に対する感謝の気持ちがいつまでもあふれ続けた。私は、少しもさみしいとは感じなかった。それどころか、この世に生まれたことを、心底ありがたく感じて、いつまでも私はその場所を去り難く思ったものだった」[北山 1988: 21-25]。

非常識かとおもわれるほどに引用が長くなったが、私はまるでここにドリーム、ドリームタイムという言葉のきわめて具体的な描写を見出したかのように感じたからである。北山は、はじめは大きい関心も持たずにカリフォルニアに住み、二年目に砂漠に入ってその魅力に気づき、デス・バレーへ行くにおよんで体験したことを上のよう

に描写した。

アボリジニの友人、ジャッキー・ウヌンの語るところによれば、かれらは一人静かにドリームの場所に行き、決してその聖なる場所には泊まらず、キャンプサイトへ帰るといふ。またかれらは他所者には決して明かすことのない儀式を、今も聖所へ集まっては実行し伝承している。そのかれらのドリームについて、「その肝要なところは、すべての生き物、すべての自然は本質的には共通性を持ち本質的には一つなので、人はその一部であり、皆が生命の本質を共有して、自然の環境にあるすべてのものと一種の基礎的同一性を分かち合っているということだ」[BERNDT 1982: 21]、とバーントが指摘している。アメリカの砂漠に感応した北山の描写は、バーントのドリームの説明を生き生きと感じさせる。

北山はこののち、日食を見ようとして砂漠に入り、縁あってローリング・サンダーと呼ぶメディスンマンに会う。そしてアメリカ・インディアンの精神世界に共鳴し、自分の心の旅の記録を書いた[北山 1988]。

この、北山によって紹介されたアメリカ・インディアンの、メディスン、夢みること、儀式の時の歌、などを読むとき、私は似たような感覚を、アイザックの『オーストラリア人のドリーミング』の神話的、民話的物語を読むときに感じてしまう。そこには、アボリジニ固有の内容が語られておりながら、しかも見事に共通した世界観あるいは世界に対する態度、といえるものがあり、バーントが、先に引用したように、そのことを要約したのである。それらは〈こどものおはなし〉のようでありながら、〈神話、説話〉でありながら、同時に、今、生きつつある精神の内容でもあるといえる。ただ覚醒意識が捉える物事の姿にこだわることをさえ、やめればよいのである。

したがって、アイザックやバーント、その他アボリジニのドリーミングを解説するほどに、その文化に入れあげた白人でない場合は、アボリジニを原始人として観念的に捉えてしまうことによってズレが生じている点にも注目する意味があるであろう。そこにはやはり未開と文明の対比が残されている。

「牛は物理的世界に住む。ほとんど精神がないといえよう。人間もまた物理的世界に住んでいて、この問題に対処しなければならない。しかし人間は文明を築き上げた、《物理的世界は十分でない》ためである。現実に打ちまかされるほど嫌なものはない。未開人は幼い子供と同じ理由から説話を好む。説話によって現実から逃避でき、単なる〈現実〉から記憶と創造力を解き放つことが出来るためである。アインシュタインも同じ点を突いている。〈……人間を芸術や科学へと導く非常に強い動機の一つは、未完成の苦しみや望みなき夢を手には、日常生活から逃避することにある。……すぐ

れた気質の持ち主は個人的生活から、客観的知覚と思考の世界へと逃避する。この欲望は、市井人が喧騒と不自由の環境を離れ、高山の静寂に向かわんとする抗しがたい憧れにも比することが許されよう。】【ウィルソン 1972: 22】

コリン・ウィルソンは私が最も敬服する思想家の一人であるが、この引用文によって見いだされるかれは、いわば文明人の精神の最も低きすまされた様相、とでもいべき、覚醒意識の最高の覚醒、ともいえる理想状態を仮定していることになる。そこに見いだされるのは〈意志〉である。そしてそのいっぽう、未開と文明の対比にまだまだ拘束されている。「未開人は幼い子供と同じ理由から説話を好む」とウィルソンが主張するとき、「牛は物理的世界に住む」というのも、人間の〈意志〉が〈現実〉を超えるというのも、実は一つの説話にはかならないとは、かれ自身が認めたくないだけのことである。

「ちょうどゴールに向かってボールをドリブルする時、サッカー選手が必要としているように。この行為は成功を約束されている《わけではない》。素晴らしい成功から完全な失敗までの甚だしい可能性があり、波乗りの時のように行為の全行程は《意志の観点から》前方を見渡しているのである。

一方、もし人間が毎分毎分の、毎秒毎秒の実存を意志によって完全に支えていることを知るに到達したら、その結果、人間の意識の質に全体的変化が生じることだろう」【ウィルソン 1972: 54】。

このようにコリン・ウィルソンは、いわば文明人としてのプライドに満ちて、ニイチェのようにそびえ立つ。思うにこれは、一つの頂上を目指すもう一つの登山路ではあるが、若いころの白隠禅師を禅病に誘い込んだような峻烈な路でもあるようである。

すなわち、〈意志〉へのこれほどの思い入れもまた、ウィルソン自身の説話にはかならないことを知るべきである。

ところで、ウィルソンは、還元主義が崩壊しつつあると指摘している箇所ではアリストター・ハーディを引き合いに出している。

「還元主義は一たとえばしばしば外見上そう見えたとしても一観念論に対する唯物論的愚弄と片付けてしまってはならない。むしろ、あまりに多くを企てたときには何も始末ができないのではないかという恐れから、《物事に始末をつけてしまおう》、片付けてしまおうとする《欲望》のことなのだ。……………1965年、正統ダーウィン主義者にしてオクスフォード大学の動物学教授であるアリストター・ハーディ卿はギフォード講演の席上で主張した。遺伝子はあるいはテレパシーに影響されているのかも知れない、生物学的現象の中にはなんらかの〈集合精神〉を仮定して、初めて説明で

きるものも存在すると。〈還元主義〉は崩壊の途上にあったのだ。」[ウィルソン 1972: 42-43]

そのハーディは、『神の生物学』の中でウィリアム・ジェームズの文を引用したのちにかれ自身の問題を述べている。

「ジェームズは次のように述べている。このように心理学と宗教は、この点に到るまで完全な調和を示している。というのは両者とも、意識的個人の外側であってその人の生活に救いをもたらすようにみえる力が存在することを認めているからである。」
「ここでジェームズは確かに最も重要な点に触れている。人間の宗教生活にそんなにも重大な役割を演じているこれらの力は、その人の潜在意識にのみ属しているのだろうか。それともそれらは自己を超えたなんらかの〈力〉との超感覚的接触のようなものを指し示すのか。それが問題である。」[ハーディ 1975: 143]

こうして、アリスター・ハーディの指摘した問題は、解答という形ではなく、我々の精神世界の現実の内容として、オーストラリア・アボリジニのドリーミングに、アメリカ・インディアンスピリチュアル・ワールドにおいて具体化されている。同時にまた、いわゆる〈文明人〉であっても、意外に多くの普通の人が、何でもないときにさえ、突然に世界の本質的な姿を感じとる例があることを、ハーディ自身、実証したのが他ならぬ『神と生物学』という業績であった。したがって、これに合わせて、本文第2節に述べた気の交流の実感の問題を考えれば、事は本質的に宗教〈的〉なる事なのであり、ドリームの世界は同時に我々の世界であるともいえることに気付かざるをえない。

とはいえ、以上はドリーミングの性質についての考察であって、この考察は決してオーストラリア・アボリジニ〈の〉ドリームという固有性については、まだ正当に触れているわけではない。それには私自身の資料読み込みはまだまったく不十分であり、引用文献の選択についても恣意的であるとのそしりをまぬがれないであろう。本文の表題を「ドリーミングのための覚え書き」とした所以である。了承されたい。なお、実感の問題については、ジャッキー・ウヌンの他、アーネムランド在住のウォレスその他の方々からきいた話に大いに助けられている。本文ではそれらの例はすべて省略したが、それらの話は別の機会に具体例として生かしたいと希望しつつ、この機会に謝意を表したい。

文 献

- BERNDT, Ronald M. & Catherine H. BERNDT, with John E. STANTON
1982 *Aboriginal Australian Art: A Visual Perspective*. Sydney: Methuen Australia Pty. Ltd..
- ハーディ, アリスター
1979 『神の生物学』長野敬・中村美子訳 紀ノ国屋書店 (HARDY, Alister 1975. *The Biology of God: A Scientist's Study of Man the Religious Animal*, Jonathan Cape Ltd.)。
- 藤岡喜愛
1988 「ミミの姿をめぐる試論ーオーストラリアのロックペインティングからー」衣笠茂編 『歴史と伝承』ミネルヴァ書房, pp.128-151。
- ISAACS, Jennifer and ABORIGINAL ART BOARD
1980 *Australian Dreaming: 40,000 Years of Aboriginal History*. Sydney: Lansdowne Press.
1984 *Australia's Living Heritage: Arts of the Dreaming*. Sydney: Lansdowne Press.
- 北山耕平
1988 『ネイティブ・マインドーアメリカ・インディアンの目で世界を見る』地湧社。
ルロワ=グーラン, アンドレ
1985 『世界の根源《先史絵画・神話・記号》』蔵持不三也訳 言叢社 (LEROI-GOURHAN, Andre. *Les Racines du Monde, entretines avec Claude-Henri Rocquet*. 1982, Pierre Belfond)。
- LEWIS, D. and ROSE, D.
1988 *The Shape of the Dreaming: the Cultural Significance of Victoria River Rock Art*. Canberra: Aboriginal Studies Press.
- NOONUCCAL, Oodgeroo and Kabul Oodgeroo NOONUCCAL
1988 *The Rainbow Serpent*. Canberra: Australian Government Service.
- STANNER, Willian Edward Henry
1979 *White Man Got No Dreaming: Essays 1938-1973*. Canberra: Australian National University Press.
- WARNER, W., LLOYD
1969 (revised ed.) *A Black Civilization: A Social Study of an Australian Tribe*. Gloucester: Peter Smith.
- ウィルソン, コリン
1979 『至高体験』由良君美・四方田剛己訳 河出書房新社 (WILSON, Colin 1972. *New Pathways in Psychology: Maslow and the Post-Freudian Revolution*. Gollacz.)。